



二輪の花



701



(本文外の文章)

—印刷されるページは書籍の様式ではありません。

—文章およびデザインは読者のためだけのものであり他に使用されません。

二輪の花

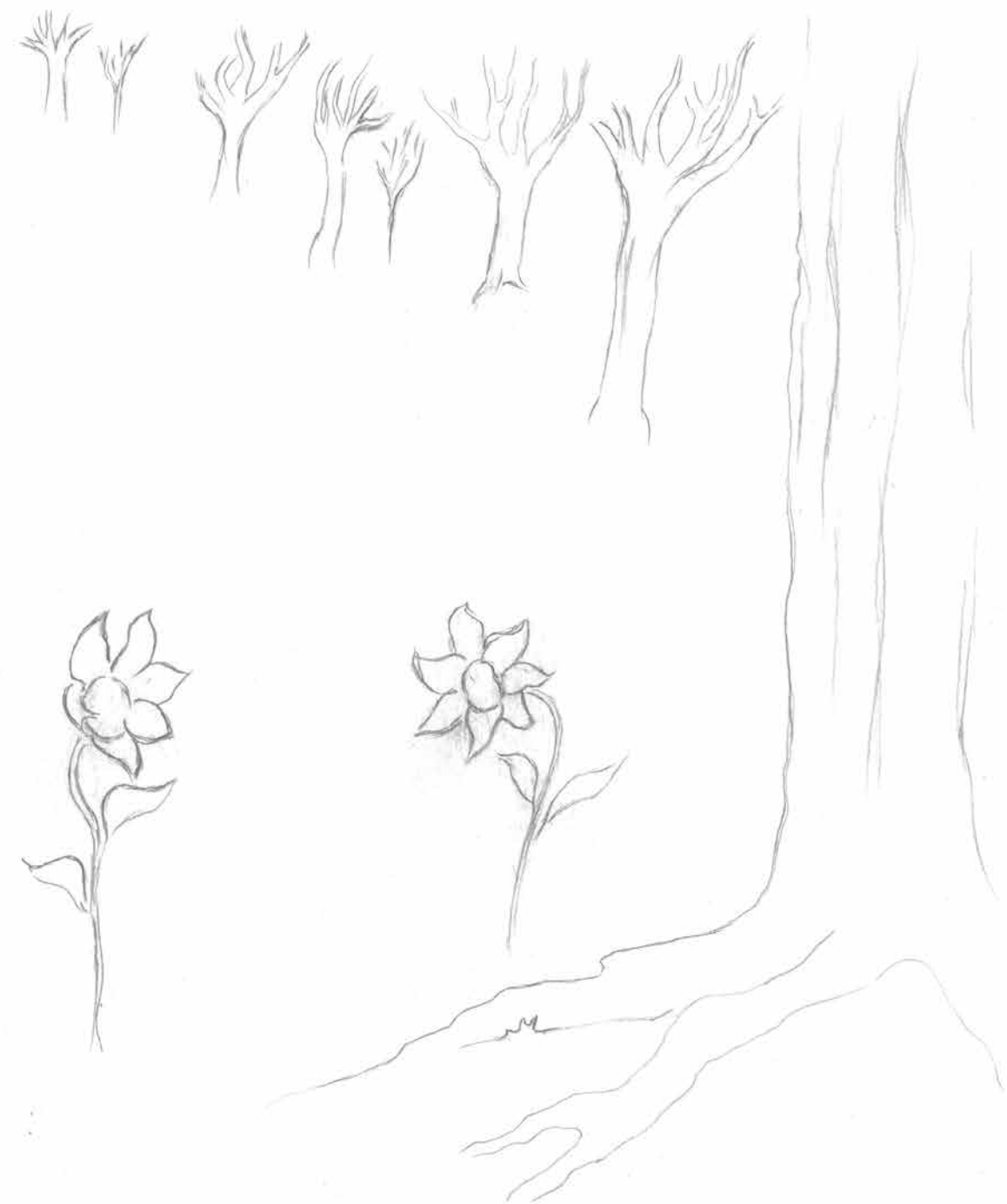
二輪の花

文&絵： イルカとカモメ

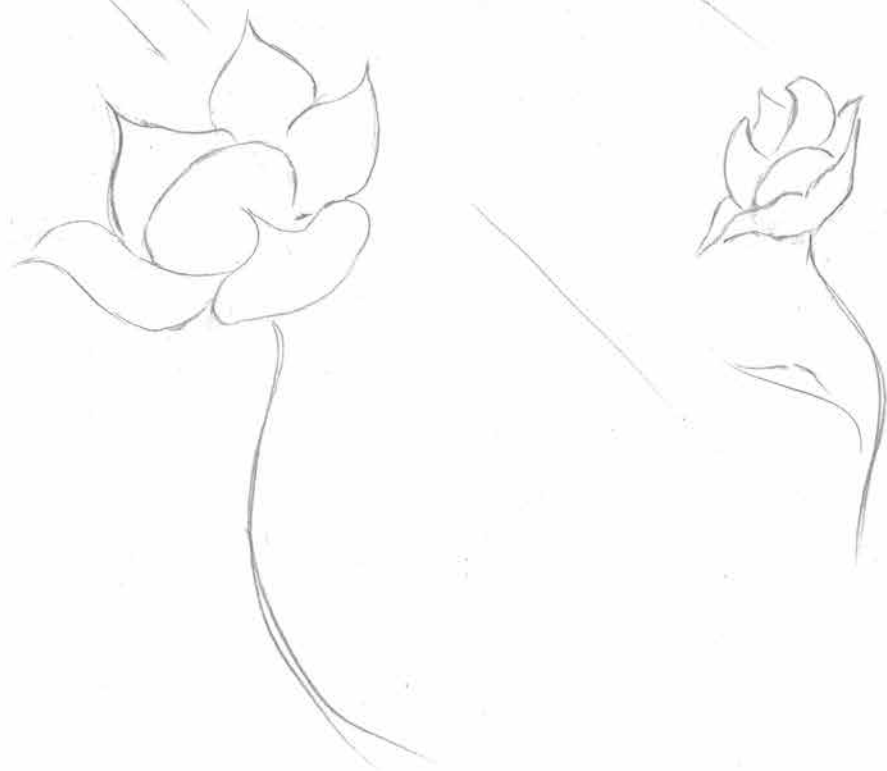
…白い本より抜粋の物語…



たった二輪の花と言うには。
二輪の花が森の傍らにひっそりと咲いて
いた。冬の盛りがそれを包んだ。
たった二輪の花と言うには、しっかりと
森の傍らに根を張っていた…



覚えている、毎朝同じ日の光を浴びて。
同じ風が吹き付けて目覚めさせた。そんな
にも近く…
お互いの香が匂うほどに。



そんなにも遠く。二輪の花が決して存在
しないほどに…



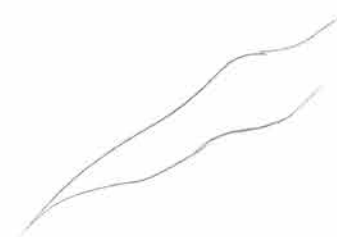
しかしそれでも森の生き物たちだったら
隣同士だったと言っただろう。



そして彼に言った：「私に触れて」



彼は葉を広げてみた。風が吹くたびに、彼女の方へ、その体を伸ばした。花びらを広げようと、その繊維と心臓の部分にある小さな黒い一握りを伸ばそうとしてみた。



そして彼女はその身体を屈めた。その葉を広げて——風が吹いている間震えていた葉…

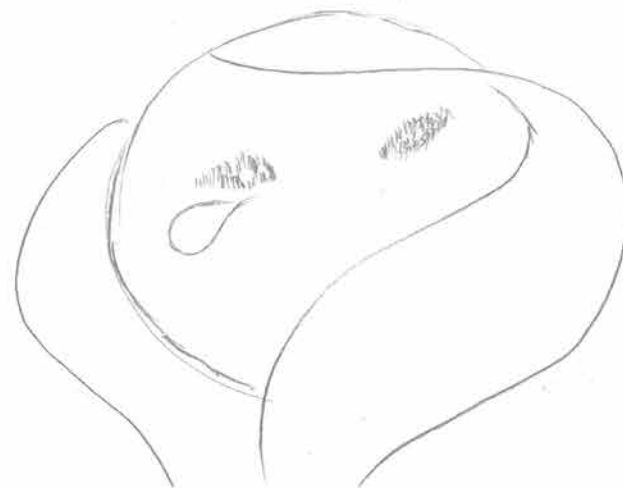
その中心を広げていた二輪の花——小さな一掴みの炭^{すみ}たった二つ分の——彼らの周りには、冬が訪れようとしていた…



「出来ない」彼女に言って、そして彼の両目の端に一滴の露が現れた。

「出来ない」彼女に言って彼の花弁は閉じ、その葉は茎の周りに寄り添いそして根はおどおどとそれを縛っている土に縮こまった。

…それから彼らはその根を広げてみようと、それらを分かとうとする土にゆっくり転がそうとした。動く度に痛みを感じた。けれど気にしなかった。二輪の花だけが風に花弁を、土にその根を広げていた…



…巨大な木々と大きな灰色の岩々と冬の
間を堪えきれず流れる川の隣に、そんな小
さな二つの花があった…



その時彼に言った：「私に触れて…」



…そして一枚の青い花弁が風に
流れた。



閉じた花弁の上に落ちて——花弁は開いた。
寄り添った葉の上弱った茎の上を転がった。
予期せず開いた葉の上を。



そして土の、それを捕えんと起きようとした
疲れた根の上を。

…けれど風が既にそれをさらっていた。
けれど気ままに森の端を——そしてそれも——
流れる川に既に落ちていた。

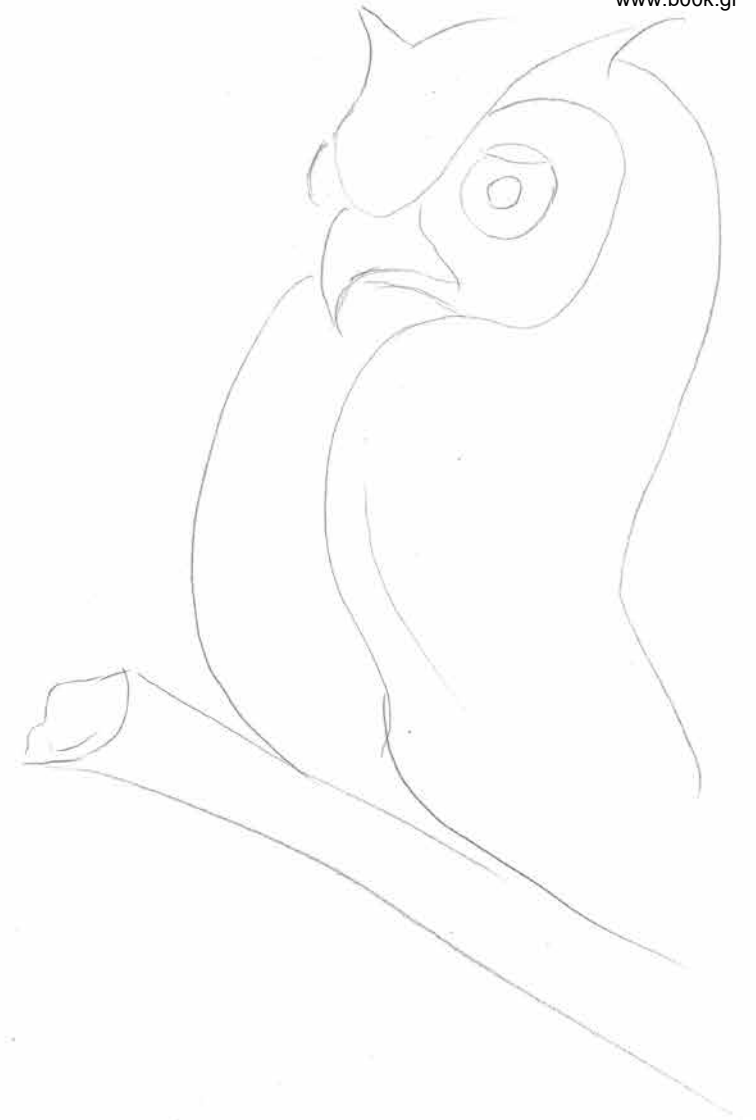
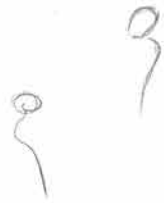
…そして風がたまたま向きを変えている
間、花卉がそれと一緒に旅するのを見るこ
とが出来ただろう。



弱った二本の茎に寄りかかる葉に少しの
間留まり、厳しい冬の世に愚かにも土から
露出した根に留まり、そんな厳しい冬、た
った二輪の花には。



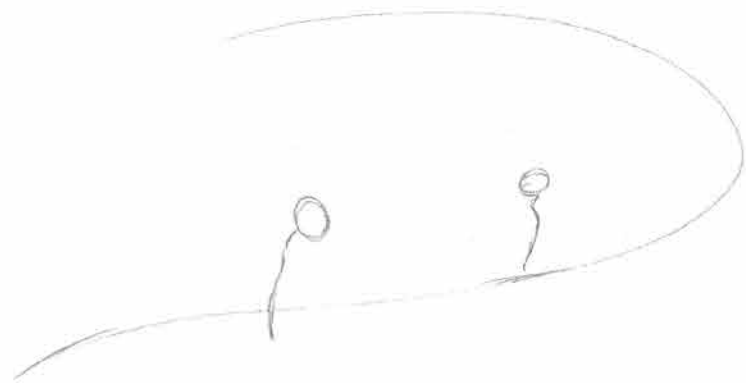
花卉がその中心部分から離れるのを見る
ことが出来ただろう、もっと向こうに立つ
別の中心に少しの間寄り添ってから。少し
の間もっとむこうの広げると葉が届く処か
ら、土に伸ばすと根が届く処から。そんな
にも遠く…



しかしそれでも森の生き物たちだったら隣同士だったと言っただろう。

季節は去り別のが訪れた。たった季節だけでと言うには。

そしてたった二輪の花と言うには。森の端で咲いて枯れてゆく二輪の花。世界の端で咲いていつも枯れてゆく二輪の花。

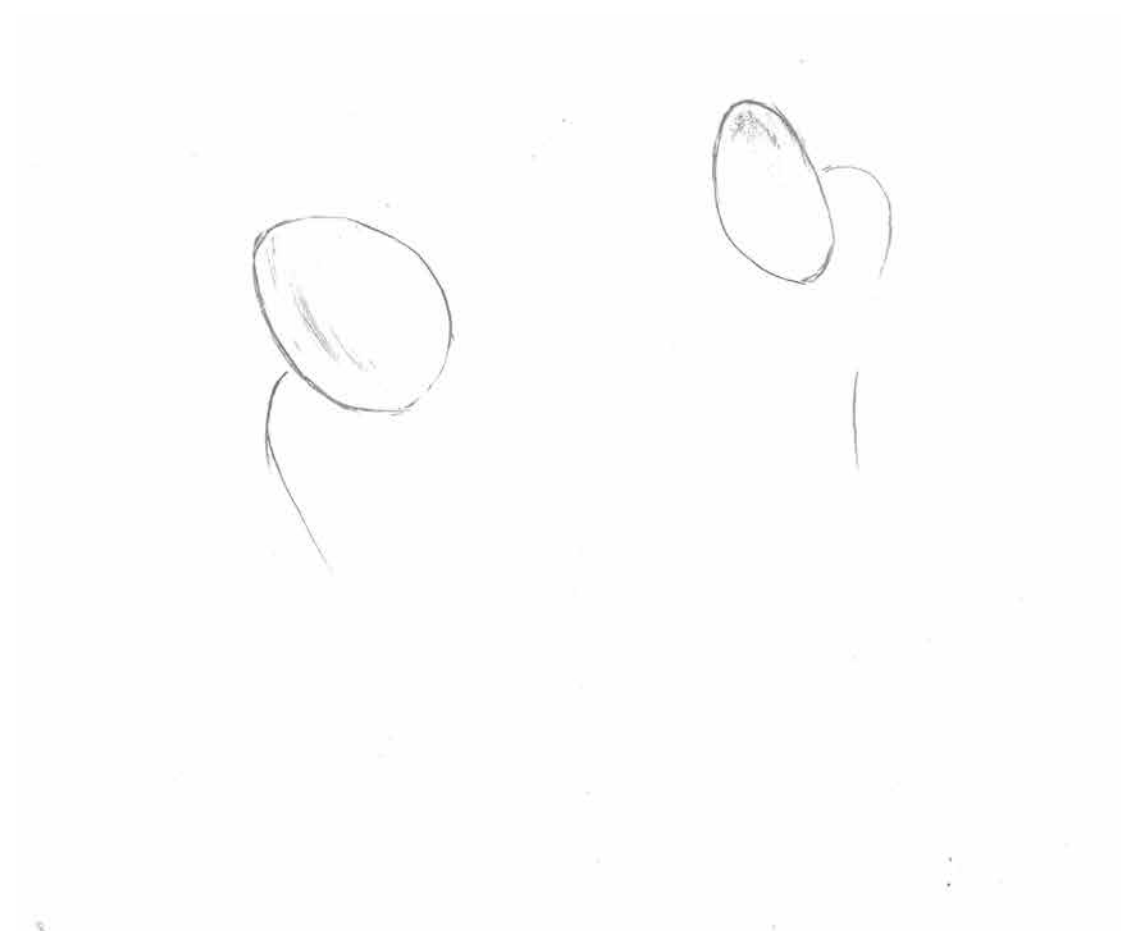


そして覚えている、いつも花卉のない二つの花。



何故ならそれらの花卉は、色彩に満ちるや、向かい合う花に旅立つから。覚えている、いつも森の端で裸の二輪の花。

中心だけが——小さな一掴みの炭^{すみ}たった
二つ分の——二輪の花。



…そして今日もまだ、冬の最中そこを通れば、恐らく一輪がもう一輪に囁くのを聞
くだろう：

「私に触れて」



イルカとカモメ

(二つの太陽が出会う時、
その時二つの世界は永遠に融合する。)

…自分が見ていたのと同じ方法で世界を見よう
としている一つの生き物に気付いていた。自分には
見ることの出来ない世界を見ていた一つの生き
物。

「心配しないで」、その時彼に言った。
「僕に何が見えるか君に言うから。」

「僕は君のために飛ぶよ…」

一瞬の沈黙が続いた。消え入る先に融合する二
つの太陽の前にゆっくりと水の輪が咲いた。

—僕も君のために泳ぐよ…

そこで、一つの太陽がもう一つをますます貫い
てゆく最中、二つの世界の物語において最も美し
く、最も不思議な取り決めがなされつつあった…

私に触れて…



太陽は昇る一方で銀の硬貨の上に輝いていた。
そしてそれは長い時間の深い眠りの後 徐に目を
開け痺れた体を伸ばした。その上ではたいへん湿気
があった！村のはずれの二階建ての農家の屋根瓦の
上。

「おはよう」、優しく片側に言った…

青い蝶

(…小さな体に、
大きな羽をまとう全ての者達へ…)

彼の声は彼女の周囲に温かく広がった。
「君が飛んでいる時」彼女に言った…
「君がその小さな羽を風に広げて太陽の光線が
それらを通り抜ける時、空の光を受けていた。
そして閉じる瞬間、——影が森の隅々を覆うように——
大洋の深い色を得ていた… それに似た色は森に
存在しない…」
「私の近くにいなさい、小さな蝶よ…」



「他の誰も、君の美しさを見ることが出来ない…
恐らく君も。
私だけ…」

「私のために一瞬飛んで、その後行きなさい…」

冥界
— 2言語版 —
詩

涼やかな風、若き日々、
公園での言葉遊び、
熱中し、心奪われ、
正しさと間違いも忘れ…



The Underworld
— bilingual edition —
lyrics

*Back at the playground of our youth,
playing with words, we lost the truth,
Forgot it somewhere in the mud,
while growing old, and growing sad...*

黒板

…君達はまだ若い。君達の体はまだ重力の崩れを被っておらず、そして君達の眼差しはまだ無限にきらめいている。

君達の翼、準備の出来ていない、未発達な翼は、君達の心臓に血が供給され力を得ることを何よりも待っている。上昇するどの風にも挑む勇気がある。君達の進路と飛行の高さは目の前にある。

太陽を恐れなくて…

到る処不在
(劇場版&舞台劇版)

—僕は君のいる処にいる…僕達はいつも一緒…

—でも、僕にはそれが分かるだろうか？…

不死の山

—目は欺く。だから人は嘘に目を眩まされる。

—それなら、真実を見させておくれ…

To All the Young

...Αυτό το βιβλίο ήταν ένα βιβλίο που δεν ήξερε ανάγνωση...

...色とりどりの一つの光が青い惑星の間を旅している...

il pianoforte

...Wir sind nur die zwei Seiten einer Münze.
Sprich mit mir...

Goodbye Sky

Ils se sont plongés dans le nectar que je leur ai offert et se sont contentés de l'ivresse leur vie entière.

...O kitabın kendi hikayesi vardı...

...*La Sabiduría es el sueño del Conocimiento: El Conocimiento soñó con la Sabiduría...*

...هذا الكتاب كان كتاب لا يعرف القراءة...

Shadow of Myself

...Бабочки из моего сада говорят, что я знаю всё. И что у меня есть ответ на все вопросы...

Почему ты отвергаешь меня, маленькая бабочка?

...This book was a book that knew not how to read...

As letras, como veem, não falam senão àqueles que as sabem ler. As letras são tão, mas tão orgulhosas!

那儿，介于两个世界之间

www.b00k.gr
(二つの『ゼロ』で表記)